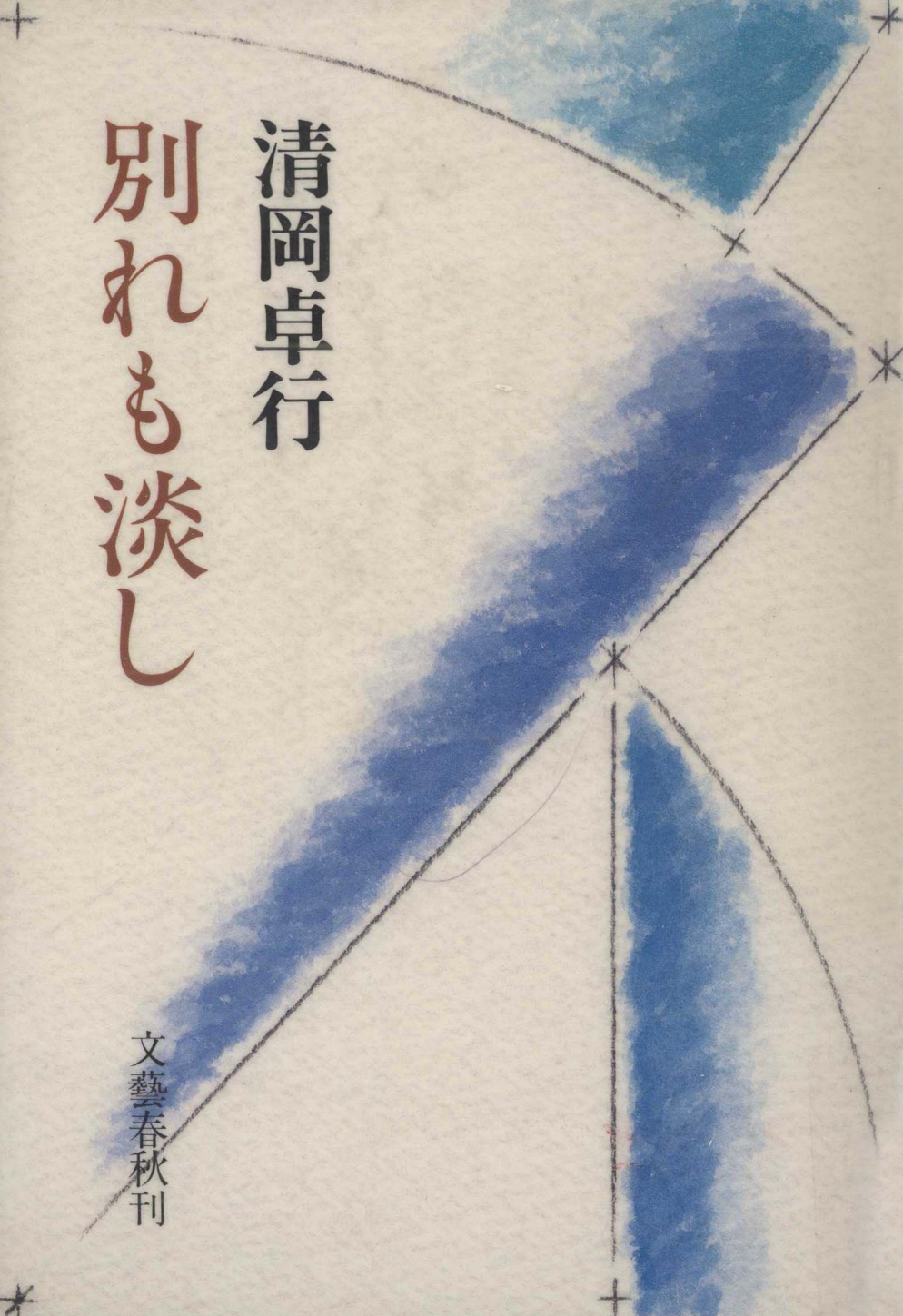


清岡卓行
別れも淡し

文藝春秋刊



別れも淡し

清岡卓行

文藝春秋刊

別れも淡し 奥付

昭和六十一年十二月二十日 第一刷

定価 一六〇〇円

著者 清岡卓行きよおか たかゆき

装幀者 高松次郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号 一〇二
電話東京 (〇三) 二六五局 一二一一

印刷 共同印刷 製本 大日製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Takayuki KIYOOKA 1986 Printed in Japan

ISBN 4-16-341110-0

目次

I

別れも淡し 13

II

コラムから 35

切れないベルト 35

ベトーヴ 37

映画詩 38

夢屋の嘆き 40

谷川俊太郎『みみをすます』

42

ホオズキ 44

ゴマダラカミキリ 46

復刻盤の喜び 48

海苔にバター 49

宮川淳とマグリット 51

訓読の得失	53
黒沢明『七人の侍』	55
フジタの画集	56
外国人の客	58
種村季弘『べてん師列伝』	60
授業の笑い	61
北京・上海・山西のダック	63
フェリシアン・ロップス	64
宇佐美斉『立原道造』	66
日本の詩の仏訳	68
『猛打賞』余滴	69
安野光雅の装丁	70
創作を刺戟したレコード	71
比類のない△深さ▽のレコード	73

III

蟻の穴 83

夏の海と恐竜展 87

アリユーさん 91

柚の香り 95

柚湯 100

夢の話を 103

済南の一夜 105

大連ふたたび 114

屠蘇より辞典 118

昔の大連の書店 121

二つのロス五輪 125

鈴木竜二氏を悼む 129

IV — 他人の作品への批評

幸田露伴『五重塔』 135

—— 個我の固執への共鳴と反撥

金子光晴をめぐって 138

1 『鯨』の位置

2 小説の一特徴

3 ロベール・デスノスとの縁

森三千代「天狗」 151

——描かれた老残のダダイスト

井上靖の詩の△白▽のイメージ

157

1 散文詩「猟銃」まで

2 散文詩「もしもここで」

山本健吉と近・現代詩 165

1 『近代日本の詩人たち』

2 詩人への好み ディクター ほか

高見順の詩 178

——詩と小説の十字形

安岡章太郎の初期の小説から 194

1 「ガラスの靴」の芸術的な均衡

2 順太郎もの・秀才の奇妙な怠惰

吉行淳之介の出発 211

——初期の小説について

北村太郎『犬の時代』と

平出隆『胡桃の戦意のために』

——詩の現在の二極点

杉山平一「解決」 228

——窓そしてガラスへの関心

片岡文雄「馬の居た町」 231

——私小説的なものの芸術的な凝縮

犬塚堯「河との婚姻」 234

——魅惑的な幻想の愛

清水哲男『東京』 237

——空虚に耐えるポエジー

那珂太郎「ロマネスク」 239

——詩が小説の頌となるとき

V —自作に触れて

『薔薇ぐるい』 249

——書き始めまでの長い時間

『初冬の中国で』 253

——詩のなかに使ってみた中国語

『全詩集』の出版 258

1 名前の呼びまちがい

2 黄葉・落葉・全詩集

3 全詩集の重さ　そして軽さ

『李杜の国で』 268

——書き終えたときの情緒

唐詩との熱い再会 272

——訓読をあらためて評価

あとがき

口絵写真撮影

高本裕久

別れも淡し

△清岡卓行エッセイ集▽

I

別れも淡し

自分が今までに経験した六つの職場における最後の日の勤務が、それぞれどんなふうに行われたか、六番目の職場におけるその情景を除いて、私から記憶がきれいに消えている。ここでの職場は、いわゆるアルバイトの場合を含まず、定職の場合だけを指しているが、具体的にいえば、それら六つの勤務先はこんなふうになる。

最初の職場は、一九四七年五月から四八年七月まで、大連日僑学校である。私はまだ大学生で、二十四歳から二十五歳にかけてであった。この学校は、敗戦によって大連の日本人のほとんどすべてが一九四七年三月までに祖国に引き揚げたのち、なお大連に残留した日本人の技術者や医師などの子弟を教育するため設けられた唯一のもので、労働公園、旧名中央公園の東南に接する同じ建物のなかで小学と中学が接続していた。私は中等科の英語と数学の教員に誘われ、たまたま定職が欲しかったこともあって、一年三か月のあいだ授業に熱中したのであった。

私がそのとき残留していたのは、一つの運命のようなものであった。敗戦の夏に先立つ春、私は東京のある大学から大連の実家に帰省したが、敗戦にぶつかって東京にすぐには戻れなくなり、

自分の勉強はどうなるのだろうかという焦燥を感じつづけた。しかし、一九四六年十二月から翌年三月にかけてつぎつぎとやってきた引き揚げ船に、私はとうとう乗らなかったのである。

それは家庭のためであった。同じく大連に住んでいた二人の義兄、かつて満鉄に勤めていた地質学者と液体燃料合成の技術者は、中国側から残留を要請され、私の両親がその家族と行動をとにもすることを運び、私は両親とともにいることを義務のように感じたからである。ただし、東京の大学に復学することが大幅に遅れてそれが不可能になるかもしれないという、なかば絶望的な気分にもかかわらず、私の心のなかに、生まれ故郷を捨てがたく感じる矛盾がなかったわけではない。

日僑学校の建物は、敗戦後すこしまで、日本人の春日小学校であった。私が通った朝日小学校や第一中学校はもちろん別の建物であったが、日僑学校が日本人の子弟のための唯一の小・中学ということになると、それは私にとって、建物こそちがえ、自分の学んだ小学校と中学校が変身して重なったようなものでもあり、その意味では母校であった。また、かつての植民地における敗戦直後の生活という特殊な辛酸とともに生きたせいか、生徒たちともずいぶん親しくなっていた。そういうわけで、日僑学校の勤務への愛着は深かったのに、最後の日のことは、授業についても、そのほかのことについてもまったく憶えていない。

たまたま、この教職についていた最中に、同じく大連に残留した化学者の娘と結婚し、家庭生活がまったく変っていたということもあり、目前に慌しく迫っていた日本への新しい引き揚げという、大きな試験あるいは幸福の航海への不安と期待のために、心はすでに職場からほとんど離れていたということだろうか。

二番目の職場は、大連から東京へ引き揚げた翌年の一九四九年四月から五一年三月まで、株式